

新年にあたって（2022年）

2021年は、前年に続いて1年間コロナ禍の中での仕事でした。350点ある在庫の流通を中心にして、新刊も発行していく当初の目標は実現できました。新刊は次の5点です。

石毛・小菅・伊藤『わかりやすい薬理学 15版』

福田 泰雄『格差社会の謎』

高野 範城『人権としての人間らしい生活を大切に 50年』（非売品）

三石 初雄他『校内研究を育てる』

2022年子どもカレンダー

創風社も創立37年目にはいり、私自身も社会科学・人文科学の出版編集の仕事について、50年を超えました。デジタル化がコロナ禍で加速していますが、出版物がどうなっていくのか、社会のデジタル化によって役割を終えた出版分野（特に雑誌）は消えつつあります。しかし、本でなければならぬ分野は残り続けています。私は本の果たす役割を改めて経験しました。

2021年6月NHKのEテレ「100分de名著」に『華氏451度』（本が自然発火する温度、燃える温度）が取り上げられました。

本はマッカーシズム（赤狩り）がさかんになったころ寓話としてアメリカで発売されました。本を見つけるとは焼いてしまう社会ですが、本が燃やされる社会は、思索や記憶を奪う「反知性主義」の社会となります。そのため本を必要とする人たちは集落をつくり本を燃やされても暗記して人間の頭の中に残していくという話です。2022年の現在は、まさに本が減少し、インターネットの情報にかえていく（デジタル化）社会です。この現代社会を考えて「100分de名著」は紹介されたように思いました。番組のテキストはSNSのようにすぐ反応を要求される社会は全体主義に向かうコミュニケーション（反射的思考）、その反対に、本はよく考えてから反応する反省的思考という分析をしています。この考え方は、1920年代にシカゴ大学で活躍したG・H・ミードの『精神・自我・社会』にありました。この本は、東大新聞研究所の稲葉三千男先生が翻訳しましたが（1973年）、私は担当編集者として約5年間もこの仕事をしました。この反射はreflex、反省はreflectionまたはreflective intelligence（反省的知能）で、わかりにくい言葉なので、稲葉先生は訳語解説のページまでつくりました。本はなぜ社会にとって重要か、G・H・ミードの訳書の出版から、もう50年も過ぎましたが、この本の重要性はデジタル社会が進行する中で「100分de名著」を見て再認識できました。

もう1冊あります。新聞で紹介されていた本で、アメリカで90年代にリバイバルしたフランクフルト学派（マルクス60%＋フロイド40%を合わせた理論）の研究者がアメリカに亡命して研究成果をまとめた『権威主義的パーソナリティ』です。この本は1950年にアメリカで出版され、1951年1月には日高六郎先生が『思想』に長い紹介を書いています。私はこの日本語訳の担当編集者として約10年間かかりました。ヒットラーの弾圧によってアメリカに渡ったフランクフルト学派の研究者たちは「なぜドイツ人はヒットラーを指導者に選びファシズムにすすんだのか」を研究した人たちです。アメリカの政治学者はトランプ現象のような問題を分析する手がかりとしてこの本に取り組んだようです。そして、2000年代になりトランプを支持する人たちの多くは「権威主義者ではないのか」というところにおつかりました。この『権威主義的パーソナリティ』

の日本語訳は日高先生のもとで学んだ若手研究者とその協力者で、1980年に日本語訳を出版しました。アメリカで原著が出版されて、40年後にアメリカでリバイバルがあり、日本語訳の出版は原著の出版の30年後です。

名著といわれるものはこのように長い生命力をもつ、社会の財産です。しかし版元の出版社はどれだけその本の生命を守り続けていけるのか、私が担当して取り組んだG・H・ミードの本、フランクフルト学派の研究者たちの本を出版した会社は廃業しています。名著の生命力は出版社の生命力より長い事もあります。

新刊を出すことだけでなく出版物の生命を守りつづける事も我々の仕事です。

コロナ禍の中で、こういうことを考えながら、2年間を切り抜けて来ました。

これから3年目に入ります。資本主義のグローバリゼーションは、果たして人類が生き残れるように変わっていくのか、それとも年ごとに悪化するのか、そういうことを考えながらコロナ禍3年目の仕事を始める事になります。

2022年は、すでに完成原稿が届いている本もあり、何点出せるかまだまだ見通しがつきません。今年もよろしくお祈りします

2022年1月1日

創風社 代表取締役社長 千田顕史

コロナ禍の中、時短勤務を続けて来ましたが、21年度後半には専門書の企画も複数入ってきて時間を少しずつ延長し、分業スタイルをもう少し取り入れながら通常の出版スタイルに近い状態に少しずつ戻り始めています。しかし欧米では再びコロナがパンデミックの様相を現し始める（様々なワクチンや治療薬が開発されているが、また、新種のコロナが蔓延し始めている）中で、今後も十分な感染症対策をしながら、仕事を継続していかなくてはいけない状況は変化がないようです。

IT業界が、情報発信の場で（出版も情報技術を使っている業界という捉え方もできるが、その中で古いメディアを守っている業界といえるが、内容は現代に通用する新しい物を刊行する事を目指し続けている。）影響力を増し、セキュリティ対策も一層意識を向けていかなくてはいけない中で、出版業の存在意義の自覚に対する認識を自分に促しながら、今後も社会の進歩に貢献できる刊行物を一点一点刊行できればと思います。

2022年1月1日

創風社 編集長 高橋 亮